

## 1 使用言語・フォントとファイル形式

使用言語は日本語または英語。日本語の場合、句読点は「,」「。」とする。基本フォントは日本語では明朝（類）11 ポイント，英文では Times (New) Roman 11 ポイント。セクション題名などでは 12 ポイント，ボールドを用いる。

原稿は PDF ファイルとする。そのまま印刷するので，PDF を作成する際には「フォントを埋め込む」こと。

## 2 用紙・枚数

- A4 用紙で 11 ページ。これにはアブストラクト，注，参考文献等を含む。末尾に異言語によるアブストラクトの 1 ページを付ける。以上で総ページ数 12。
- マージンは左右上 25mm，下のみ 35mm（ページ数挿入のため）とする。ページ番号は，原稿の表面には記入せず，裏面の右上に鉛筆書きで付ける。
- 1 ページ 41 字，英文で 15 語前後，37 行を原則とする。1 段組とすること。
- 日本語，英語ともに禁則 (justify) で行末揃えとする。

## 3 アブストラクト

論文の冒頭，タイトル，氏名・所属のあとにアブストラクト（英文で 150 語，日本語で 300 字前後）をつける。さらに，論文の末尾（参考文献の後）に，英文論文の場合は日本語，日本語論文の場合は英語で次の項目からなる 1 ページをつける。1. 論文のタイトル，2. 著者名，3. 所属名，4. アブストラクト（英文で 300 語，日本語で 800 字前後）。

## 4 原稿の構成

原稿は以下の順序で構成する。

1. 論文タイトル(14 ポイント，ボールドにしない)
2. 氏名，所属(12 ポイント)
3. アブストラクト
4. 本文
5. 注
6. 参考文献
7. 論文本文と異なる言語で次からなる 1 ページ。1. 論文のタイトル，2. 著者名，3. 所属名，4. アブストラクト（英文で 300 語，日本語で 800 字前後）。

## 5 例文

例文には(1) のように番号をつけ、日本語、英語以外の例文には日本語または英語のグロスと訳文をつける。

(1) *yeš (nam) arbaa xatulim baxéder*  
EXIST PL four cats room:LOC  
'There are four cats in the room.'

## 6 和文論文に関する注意点

- 和文の中に欧文（語句）を混ぜるときはフォントが Times に切り替わっていることを確認。

× 英語の数字は One, two, three, four  
○ 英語の数字は One, two, three, four

- 上記スタイルで「ボード」と指定されているところは、明朝体をボードにする  
と見苦しいので MS ゴシックを用いる。

× 明朝のボードは見苦しい ○ ゴシックのほうが美しい

- 丸カッコ（ ）の使用。全角の丸カッコは全角文字を囲む時のみ用いる。

× 英語（American English）では  
○ 英語（American English）では

- 数字は1ケタでも英数フォントを用いる。

× 私は2008年の論文で3つの修正案を提案した  
○ 私は2008年の論文で3つの修正案を提案した

- 和文の中で英（欧）単語・語句を列挙する時は全角の「,」ではなく「,」（英数字のカンマとスペース）を用いる。

× 英語の月名は January, February, March などである。（全角の「,」）  
× 英語の月名は January,February,March などである。  
○ 英語の月名は January, February, March などである。

- 記号・ギリシャ文字などは全角で「あるふぁ」から変換するのではなく、Symbol などのフォントを使った「記号」を用いる。

× 節点  $\alpha$  は節点  $\beta$  を c-統御する  
○ 節点  $\alpha$  は節点  $\beta$  を c-統御する

## 7 参考文献

参考文献(論文テキストの中で言及または引用された文献に限る)は文章中では「Geach (1962), 西山 (2003)」などと言及し, 論文の最後に参考文献(英文では **References**) の見出しの下に, 著者(共著の場合ファースト・オーサー)の姓のアルファベット順でならべる。

単行本については著(編)者名・発行年・書名・出版社・発行地を, 論文については著者名・発行年・論文名・掲載誌名・巻/号・ページを記入する。論集は単行本に準じる。

ジャーナル掲載の論文の例として池上 (2009), Romero (2005), 論文集掲載の論文の例として Pesetsky (1987), Davidson (1967) の引用例を参照。

- 著者名の後にスペースを入れずにカッコを書く人が多いので注意。

- × As Pesetsky(1987) observes . . .

- As Pesetsky (1987) observes . . .

- × 池上(2009) が指摘するように . . .

- 池上 (2009) が指摘するように . . .

なお, これらと異なるカテゴリーの文献の引用スタイルについて事務局に問い合わせることはお控え下さい。

### 参考文献

Davidson, Donald (1967). The logical form of action sentences. In Rescher, N. (Ed.), *The Logic of Decision and Action*, pp. 81–95. University of Pittsburgh Press, Pittsburgh.

Geach, Peter Thomas (1962). *Reference and Generality*. Cornell University Press, Ithaca.

池上嘉彦 (2009). 「認知言語学における〈事態把握〉:〈話す主体〉の復権」. 『言語』, 38: 10, 62–70.

西山佑司 (2003). 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』 . ひつじ書房, 東京.

Pesetsky, David (1987). Wh-in-situ: movement and unselective binding. In Reuland, E & ter Meulen, Alice (Eds.), *The Linguistic Representation of (In)definiteness*, pp. 98–129. The MIT Press, Cambridge, Mass.

Romero, Maribel (2005). Concealed questions and specificational subjects. *Linguistics and Philosophy*, 28, 687–737.